

〔特別寄稿〕

23

大学院特別講義録 1

『臨床研究のすゝめ』～研究がつなぐ心理臨床の今～ (2011年3月5日)

私は何をしてきたのだろうか？

間藤 侑

こんにちは。ご紹介頂いた間藤です。今日は配布資料の方には基本的に入り込まないつもりですが、ちょっと目を通していただきます。「私は何をしてきたのだろうか」というテーマの最初の「後の心理臨床へのキーワード的経験」の第一は、「寝てることと歩くこと」というちょっと変な表現ですが、ここにあるように、中学一年の後半は病気で安静に寝ていられなかったこと、またその後は山登りに夢中で、歩くことばかりだったことの二つが、なぜか大きな意味があるようにも思えました。それから、皆さんには信じ難いかもしれませんが、病気が治って復学した中学1年から高校3年卒業までの6年間、私は家から高校まで10Kmの道を、冬は6年間歩いて通学しました、除雪車なんて無い時代ですから、片道3時間・往復6時間歩いてたわけです。自分でも信じられない体験です。新潟大学に来てから1回だけ、冬に高校から家まで実際に歩いてみました。こんなところを冬の毎日自分が歩いていたのかと思うほど辛かったです。しかし今考えてみても、辛いという感覚が思い出せません。家まで後2Kmの最後の田圃道の原っぱを、一緒に通った友だちと二人で、特に吹雪の日などは、大声で泣きながら帰ったという記憶ははっきりとありますが、その中には辛いとかの感情表現できる記憶は無いのです。自分のこうした体験からも、人間の記憶って面白いと感じます。体験としての実感と、意識として理解することの違いもあります。多分フロイト理論で説明できそうですが。だから現実での記憶の共有やすれ違いは、ややこしくなるはずだと思います。

I. 後の心理臨床へのキーワード的経験

- (1) 寝ていることと歩くことだけの、他に何もできない、十分に「**暇な**」時間

⇒想像・空想の時間

*1942年（旧制中学1年時）：病気休学・離れの一室で隔離、6か月の孤独な生活

- *2度目の中学1年～高校3年まで、6年間の積雪期（往復6時間）の徒歩通学
 - *登山：歩き登るだけだから、たっぷりと「**暇な**」時間（特に単独行）
 - (2) **星の観測と数学**（というより数のもつ神秘さ？）に熱中
 - (3) **寮生活**：（海兵・陸士・旧制高校など卒の）経験豊かな先輩からのイニシエーション的刺激体験
- ⇒ドイツ文学・ロシア文学・哲学・外国映画・演劇などとの出会い

※以下、枠内は資料メモの部分

いずれにしても、こうして振り返ってみると、少なくとも大人になる前の自分の人生の中で、私は暇な時間がいっぱいあったんだな、という気がします。暇と言ってももちろん何にも無いただの空っぽではありません。半年間安静に寝かされていた時間は、子どもっぽいながらも自分で空想の世界を創り、そこに生きていたことを思い出します。山も冬の通学も、歩いた時間はいろんなことを考えていたはず。ユングの心の4機能が総動員された膨大な心の体験を積み重ねていたんだらうとも思います。それが何か役に立っているかどうかはわかりませんが、心理臨床の中ではもしかするとどこかで役立つことがあるのかな、ということもあります。つまり一つの出来事に対してあーでもないこうでもない、こうかもしれないという風な空想や想像の力とかです。

さて、ちょっと話が変わりますが、私は大学に行くまで天文学者になりたいことしか頭にありませんでした。文学や映画などは全く無関心でした。ところが、大学に入学し新発田の寮に入ります。そこは明治になって、かつての新発田藩主が藩士の子弟の勉学のために創った寮でした。今も東大近くに入り、NHKで紹介されたこともあります。私が入っ

た頃は戦後まだ5年。一人一部屋の20人ほどの寮生のほとんどが、戦争中、海軍兵学校、陸軍士官学校、あるいは旧制高校にいて、戦後大学に入りなおした先輩たちでした。私は新制高校の2回生ですが、新制高校卒は3人くらいしかいなかったと思います。先輩たちは年齢もかなり違うし、人生経験豊かな人たちばかり。その人たちの世界に物凄く大きな衝撃を受けました。彼らの話題には、聞いたこともない人名や言葉が、まるで暴風雨のように飛び交います。基本的には、文学、哲学、映画、演劇、芸術が中心だったのですが、先輩たちの学部は文系理系バラバラでした。

なぜこういうのを当時の学生たちが共有していたかということは、司馬遼太郎の「坂の上の雲」にとってもよく現れています。明治時代のエリート軍人たちは、日本の代表者だったのです。特に海軍は外国に行き学ぶことが多かったはず。まだ近代日本の夜明けの時代、彼ら自身イコール外交官でもあったわけです。当然海軍兵学校の学生たちは、英語、ドイツ語、フランス語、あるいは哲学、文学、などを一般教養として叩き込まれたと言われていました。もう明治ではありませんが、そういう教育の伝統の流れを受けた学生たちが寮にいたのです。彼らの会話そのものが、私なんか聞いたこともない人名や言葉や考え方が出てきて、ただ圧倒されました。振り返ると、田舎者の何も知らない青年が、都会に出て魅力的な女の子たちに圧倒され、そこで身を崩してしまう、そんな人生の出会いを自分の中で感じさせます。

り理解できなくなったことに気づき、慌てます。やがて、今思うと多分うつ状態になり、3か月学校を休んで家に帰ります。当時の大学は出席なんてとりませんから、何とか試験だけはやり過ごしました。しかしもう天文学者には絶対無理だと観念し、専攻を変えようと思いますが、どこも欠員がなく、最終的には全く興味のなかった心理学科に拾われました。

そこで、自分のような精神状態になった場合、心理学はどう扱うのかと、同級生になった人に聞いてみます。すると彼は、そんな心なんてよく分らないものは扱えない。心理学は科学だから、行動とかははっきり解る意識など、外に取り出して説明できるものだけが研究対象だと、当然のようにしかし解りやすく説明してくれます。すぐくはぐらかされた感じがして、心理学にほとんど興味を失いました。ですから正直、大学ではいい加減な勉強しかしてこないで、後に大学の教師になった時に大慌てで初めて心理学を真剣に勉強した、ということがあります。まあこんな形で思いがけず心理学の世界に入りましたが、当時の心理学は心理臨床とは、心理テスト以外はほとんど無縁だった気がします。私がそう思っていただけでもありませんが。

しかし4年になった頃、学生の誰かがノンディレという言葉と理論を持ち込みます。私たち学生や若い助手の先生たちの中で、ロジャーズの理論勉強会が作られ、みんな夢中になります。それまでの実験心理学とは全く違う新しい発見だらけで、ああでもないこうでもない議論したり、非常に新鮮だったことを今も思い出します。

Ⅱ. 理学部数学科から心理学科への転科

- * 数学科2年でのうつの症状による不登校（約3か月）⇒心理学科2年に転科
- * 心理学は行動科学、「こころ」は精神科医の領域と説明され、**心理学に失望**。登山と文学に熱中。唯一、成瀬悟策先生（当時助手）に催眠技法を習い治療実験を手伝う。
- * 4年になる頃学生間で「ノンデレ」が話題になり自主勉強会。だが当時の教授たちの関心は？

私は、なまじっか数学や物理に自信があったばかりに、新しい世界の方が珍しくてそっちに夢中になっていたら、2年生になって専門の学科がさっぱ

Ⅲ. 1955年卒業。創設間もない昭和女子大初等部で子どもたちに出会い、子どもに興味を抱く。

1年後昭和女子大附属教育研究所助手（実際はほとんど小学校教師＜免許無し＞）。所長は斉藤茂太、副所長はクレッチメルの「体格と性格」を訳した相場均など、所員全員が当時の錚々たる精神科医たち。⇒1959年初等部第1回生を卒業させた後、母校の専攻科でもう一度心理学を学び直す。同時に、日本文化科学社で様々な心理テスト評価のアルバイト、種々の心理テストを実践的に学ぶ。

IV. 1961年田中教育研究所研究員（遊戯療法、心理テスト、教育相談）として心理臨床現場に立つ。

当時の所長は田中ビネーの田中寛一博士、所員は全員国立大の心理学の教授たち。研究員は助手？（間藤は主に遊戯療法室、もう一人の研究員、同級だった松原達哉は主に心理テスト担当）1962年秋、奇妙な3歳児を担当。ずっと後年、典型的な（カナー的）自閉症児だったと気付く。どの所員に訊ねても「気長に対応したまえ」としか応答なし。当時の心理学者はこのレベルだったのか。

田中教育研究所で、一人の自閉症児に出会います。もちろんその頃は奇妙としか言いようのない3歳児でした。所員であるそれぞれ有名な心理学者たちの関心は、臨床心理学とは無縁だった気がします。半年ほど経ったある日、彼は、私が名前と呼ぶと、私を振り向き、一瞬目が合ったんです。それはとても感動的でした。私は多分ノート1ページほどに記録メモをしたのですが、いつのまにかどこかに紛れて見つかりません、とにかく初めて彼と目が合ったことに、どんな意味があったのか、そんなことをいっぱい書いた覚えがあります。まもなく私は、日体大に就職。新しい仕事に追われ、この子のこともいつか遠くなっていきますが、時々ふっと、彼はどうなったのかなと思うこともありました。

V. 1963年日本体育大専任講師。

ここで当時の一流スポーツ選手、またその陰で挫折する多くの若者と出会う。挫折や自殺未遂や失恋から駆け落ちまで、さまざまな心理臨床事例を経験。小さな教室を改造した私の研究室は、挫折学生の溜り場化する。やがて「フロイト研究会」とか「心理研究サークル」が生まれ冊子も発行。一方で、多様なスポーツのトップクラス選手たち（約100名）を対象に、ロールシャッハ、MMP I、E P P S、Y Gの4種のテストバッテリーを実施、スポーツ種目と選手の人格との関連などに興味を抱く。

VI. 1974年新潟大学教育学部へ。

幼児臨床心理学などを担当。後、（延べ8年）**附属幼稚園長**兼務。成瀬先生からテキストとして推薦された先生編著の「幼児臨床心理学」で、「カウンセラーと保育者の共通性」の項に刺激を受け、幼児教育にも関心。後に保育学や発達心理学関係の友人たちと**保育臨床**という新しい研究分野を拓く。

VII. 箱庭療法との出会い：

新潟大着任の頃、秋山さと子の「箱庭療法」を読み興味を持ち、用務員に手作りの砂箱を作ってもらい自分で体験。授業でも紹介する。幼児教育学科学生で「幼児の箱庭体験」をテーマとする卒業研究が2年続く。文献も乏しく、当時箱庭研究の中心と言われていた京都市教育センター（？）に文献について教示してほしいと手紙する。やがてA4の封筒に厚さ3センチ余のコピーが送られてきたが、「今手元に在る日本語の文献はこれだけ」という添え書きがあり、しかもその半分は秋山の「箱庭療法」1冊丸ごとのコピーだった（夜明けの時代）。やがて東京での「箱庭研究会」に毎回参加し、秋山氏とも親しくなる。河合隼雄らのユング関連の著書群に大きな刺激を受ける。

1980年、20代青年の相談を受ける。1ヶ月後、本格的ケースとしての箱庭療法を始める。秋山氏に何回かスーパーヴァイズを依頼、興味を抱かれたようで自分の研究会での発表も薦められるが、全国的な箱庭研究もまだ初期の頃で、事例も途中、自信も無くためらっている中に、やがて秋山氏死去。

資料にも書きましたが、分校の用務員さんに頼んで、本と同じ寸法の箱を作ってもらいます。砂は新潟の五十嵐浜の砂を車で運び、砂の塩気を取るために水で洗っては乾かすという作業を繰り返しました。これが最初の手作りの砂箱。新大から青陵に移り、辞めるまで現役として働いてくれた砂箱です。学生の卒論にも活躍してくれましたが、文献も少なく、箱庭療法の夜明けの時代でした。青陵を辞めてから、今も別の所で出番を待っています。資料にも書いた京都市教育センターからの歴史的な資料も、青陵の

研究室にずっとしまっておいたのですが、辞める時にうっかり処分したのか、見つかりません。

そんな時代。例えば私が出会った、おそらくカナが発表した自閉症の子ども、ノンディレクティブという言葉で論じられていたロジャーズ初期の理論など、まだ心理臨床という言葉も一般には使われない草創期、私自身もいろんな体験が何に役に立つのかも分からないような時代の中に、ずっと生きてきた気がします。

*心理臨床の論文のこと

心理臨床の論文というのは、普通の科学的論文とはちょっと違います。時にはたった一つの事例だけで、そこに普遍的な意味があると考えられれば、十分に論文の価値があることもあります。科学として成立してきた心理学は、大雑把に言えばたくさんのデータを集め、そこから確率論的な形で一般的傾向や法則を見つけようとしています。だから一人ひとりのことについては関心を持たず、大勢の人の中に共通する傾向を見つけていくわけです。

また、臨床の危なっかしさは、一つのものをやっていてこれでいいんだというところがありますが、そのたった一つのものが普遍的な意味に繋がってなければ、ただ単にそういうことがあるねというだけです。その見分けが難しいというか、怖い所があります。例えば私は今ここで、何してきたんだろうかということを語っています。これはもちろん事例研究ではありませんが、ケースとしての私という人間の物語をしているとも言えます。ということは、ここに普遍の意味が見出せなければ、ああ間藤の話だ、ただそれだけのことという風に終わってしまうわけです。そう考えるとすごく緊張します。そこに普遍性があるのかなのか。聴いている皆さんが、普遍性の何かを発見してくださると嬉しいということです。自分のこれが普遍の意味を持つなんていうことは、振り返ってみてもなかなかわかりません。そんなことで、本当にあちこちですけども、「臨床」という言葉にこだわって自分の話していることを、そういう方向から見ていくことも出来るかなと思います。

*人の生きる世界を考える2つのキーワード：原理と物語

それからもう一つ、最近読んだ竹田青嗣という哲

学者の文に興味を覚えました。それは、人間自身または人間の生きる世界を考える場合、2つの方式があるという分け方で、非常に納得のいったところがあります。一つは世界に既に存在する「原理」を見つけること、もう一つは、世界にまだ存在しなかったものを創っていくことである、という考え方です。そして、第一の原理は哲学によって「発見され」、第二の世界を創っていくものは文学と宗教だと言います。第一の例として、ヘーゲルとニーチェとフロイトを挙げています。これにはちょっとびっくりし、フロイトがなぜ哲学の分野に入るのかと考えてみました。

詳しく説明されてないので私なりの理解ですが、多分心の構造を3つの装置で説明したことでしょうか。先ずIchです。イッヒを中心とし、Uber Ich（ユーパーイッヒ）とEs（エス）、この3つを心の装置としたことかなと、とりあえず理解します。Ichは英語ではego（エゴ）と翻訳されましたが、エゴと訳すことでフロイトの言わんとした意味が薄まったとも言われます。私もやはりドイツ語のIchの方がエゴよりわかりやすく感じます。日本では自我ですが、Ichというのは「私なるもの」と私は理解しています。それに対してユーパーイッヒは、ドイツ語的には上位自我、つまり「イッヒの上に立つもの」ですが、普通はスーパーエゴ（超自我）と訳されます。この3つの組み合わせが人間の心を作っている原理なんだというわけでしょう。私は後にユングも大変興味を持ち勉強しましたが、この「フロイトは哲学」という考え方にはある程度納得します。フロイトの考え方は、ユングと少し違います。ユングはそんなに原理・原則と主張していない気がします。もっと深い意味や曖昧さを含んでいて、また魅力的ですよ。また他の二人は、簡単に言えばニーチェは人間の権力志向、ヘーゲルは人間の欲望を人間世界を解く原理として考えています。

そして竹田さんは、もう一つが物語るものとしての宗教と文学であると言っています。宗教と文学が哲学と違うところは、元々何も無い白い紙がそこにあるだけの、そこに自分の手で新しく何かを書きあげる。その何かとしての作品、ひとつの物語のようなものが生まれる、そこには人間が描かれる。だから原理的なものがどこにもなくて、そこに新しく生み出された言葉を通して人間世界が理解されるという。この2つの考え方って凄く面白いなと思います。

また、それを読みながら昔のことを思い出していました。私はある時期、家が近かったりして、駒沢大学の学長から後に永平寺の貫主となる、山田霊林師と知り合います。永平寺の貫首（つまり曹洞宗・臨済宗という禅宗のトップ）の部屋に行ったことがあります。永平寺の一番奥は、下のざわめきなど一切聞こえてこない、全くの別世界です。静かな風と、時々ポンという鹿威しの音だけしかありません。もちろんここに入出入りする坊さんは限られているはずですが、こんな世界にとっても憧れました。まだ独身、半分くらい本気で、出家したい場合のことを聞きますと、「ああ、いつでも来ていいです。何にも要らない、何にも持たないでこの門を叩けば入れてくれます」と言う。もちろん入るのは簡単ですが厳しい修行があるはず。結局は俗っぽい心を捨てることができず、坊さんにはなれなかったですが、数々の心にしみる体験と出会いました。思いがけないところで繋がっていた他の何人かのお坊さんたちにも出会い、禅の話を聴く機会が多かったです。新潟大学に来る前の時代です。ユングも禅宗の哲学者鈴木大拙と交わって影響を受けたことも後で知ります。しかし私自身は、まだ中途半端に生きていた頃だったと感じます。

この正月から、新潟日報に五木寛之の親鸞（後篇）が連載されています。親鸞の生きてきた時代と世界が、現代とつながっていることを感じます。親鸞の物語は、人間の生きてきた姿と心の在りようを、作者が無から作ったものですね。竹田さんが言うように宗教とか文学は、確かに一つの世界を作っていくものなんだということを実感します。

VIII. 興味深い心理臨床事例との出会い

(1) 言葉がかげろうのように頼りないと訴えた事例

このケースは約1年半で終了するが、複雑な家族関係がからみ、研究対象としても興味深い内容ばかりで、作品の象徴性や内容の豊かさ（複雑さ）は1冊の本にできるほどとも思えた。クライアントの奇妙な行為（話しあう言葉が**かがれろう**のように頼りないとの感覚）が読み解けず、心理学以外の学問領域でヒントを探す。出会ったのは無意識の領域も視野に入れる**言語論、記号論**。ケース理解よりも学問としての面白さにかなりのめり込み、新しい視野の発見も

多く、大きな影響を受けた気がする。

学会発表に値すると思ったが、プライバシーを考え断念。部分的に紀要に書いたりしたが、20年以上蔵っていた10年程前、もういいかなと「箱庭療法学会」で発表。しばらくして学会から事例投稿意思の有無を問う連絡を受け、発表を承諾。しかしほぼ原稿を書き上げた頃、突然このクライアントから電話が入る。私が青陵大学に在ることを知り、比較的最近結婚した妻が心理カウンセラーになりたいということで訊かれる。この事件で学会発表を断念。作品を紹介する心理臨床事例発表の難しさを痛感。

箱庭を使った最初の本格的な事例との出会いは、本当に興味深く、ここには極めて単純にしか書いてありませんが、多分1冊の本が作れるほどの内容でした。事例としては一人の男性のことしかまとめていませんが、実際にはやがて弟も通ってくるようになります。兄とは別の日に面接していましたが、2人と関わることは難しくなり、知人の精神科医に弟をお願いします。箱庭作品の中にも、親と子、兄弟同士、あるいは夫婦としての父と母など、家庭の中の複雑な関係などがからむ実に複雑なケースでした。授業で、箱庭の事例として使ったことはありますが、ほとんどは表に出せずに終わっています。この箱庭の事例も、こんな風にすればもっとよかったのかなとか、自分の書いた論文を時々頭の中で書き直してみたりしていました。また、次の青年も気になります。3番目の事例は納得する形で終わった感じがしますが、実際には心の問題に一切触れず、作品の変化だけを書くということを約束して発表したものです。しかし、こうしたかつて一旦まとめたものを、また振り返って見直し、新しいものを発見していくという作業や姿勢は、臨床研究ということには不可欠なのかなという気がします。

(2) 特殊な鋭い感受性能力をもつ青年の事例

統合失調症の疑いありと診断されたことがあられるらしい20代青年男性が、母親の手をしっかりと握って研究室を訪れたのは、この母親との長文の手紙のやりとりが8カ月続いた後である。

精神的不安定さなどで高校2年で中退。パソコンのプログラマーとして優れた能力あり、町の教育委員会などでアルバイト。しかし精神科医、教師、教育相談センターの相談員などとの

関係で常に傷つき、ひきこもり状態になる（と母の証言）。この母が、たまたま間藤が新聞に書いたSFの解説がきっかけで、（常に長文の）手紙のやり取りが始まる。この間母親は、トラブルを起こしては傷つく息子の相談についての適不適を、さりげなく試していたと後に推測する。8ヶ月後母親一人で研究室を訪ねてくる。ちなみに私が心理学の教師であるとは会うまで知らなかったらしいのも、考えると面白い。

彼はしばしば**一種の超能力現象**を見せる。オーラ、親戚に頼まれての病気の身体的部位の透視知覚などなど。また、学生がパソコンのことで訊ねてきた時、たまたま部屋にいた彼が簡単に解決してくれる。それ以降、彼はしばしば学生の相談相手になる。彼の能力を利用することがセラピーに有効ではないかとも考え、積極的に学生と付き合わせる。学生たちはクライアントとは全く思っていなかった。一度試しにカウンセリング学会で発表。同じような経験をした参会者がいて情報交換をする。

出会って約1年半後、新大退職の 때가 近くに、面接しながらこの先のことを考えていた。すると突然彼は、「これからはパソコンで自立する途を考えようと思うので、来週からは来ません」と言う。こちらの考えを明らかに読み取られたと感じた。未完のまま、それ以来彼とは会っていないが、母親からは時々手紙が来る。残念なことに数年前に発病し、今はまだ入院中とのこと。もっと他の技法は無かったのかと、今も時々振り返る。

(3) 立体コラージュの世界に新しい技法の可能性を知った事例

これも約1年半で終結するが、初期の約5カ月は、毎週来室するがほとんど会話は無く、ものに憑かれたように凄まじい集中力で立体的コラージュを作り続け、私はただ傍で観ているしかなかったが、むしろそれだけに、今も各回のクライアントの姿が、ビデオカメラの再生のように思い出せる。また、会話ができるようになってからも、作品に関する質問には短く感想や意味を説明するくらいが多く、幼児の遊戯療法と似ているが、作品の迫力は凄かった。

この事例の終結は、ある意味でドラマチック

である。ある日いつものように黙々と立体コラージュの作品を作っているのを観ていて、ふっと「今日で終わるのかな」と感じる。それをさりげなくつぶやくように口にしてみる。すると黙々と手を動かしていたクライアントは、すぐに「そうみたいです」と人ごとのように応える。そして間違いなくこれがセラピーの終結となる。最初から最後まで、作品はすべて立体的であった。上の3事例でこれだけは終わりが納得できた。

なお上のような3つのケースは、私にとっては「事例」という突き放した表現ではなく、言うなれば「出会った出来事」という感覚がどこかにあるような気がします。

Ⅷ. 付け足しと終わりに

それからもうひとつ、これ面白いなという風になったものがあります。それは、京大の大学院で学生のトレーニングのために発行している臨床心理事例研究という、大変読み応えのある研究誌があります。これが古本屋に売られたりしたことで、プライバシーに関する問題があって一時中断。また復活しているそうですが、この26号にとっても面白い内容があります。そこで、ある院生の論文に対する老松克博先生のコメントにとっても興味を覚えました。先生のコメントの中心は参考文献が一切無いこの論文についてでした。とにかく参考文献は学術論文の基礎的な構成要素ですから、そうした文献無しの学術論文などは考えられませんが、論文の著者は博士課程在籍者です。当然承知の常識的スタイルをあえて選択しなかったのは、論文の中味に関係する。その意味では、この論文のようにファンタジーやイメージネーションを中心として綴る論文には相応しいスタイルではないかと、老松先生は肯定しています。

ただし、そこには様々な落とし穴がある。あっさりしすぎる構成、対象にしっかりと密着していない、あるいは、受動的に情緒的な流れに巻き込まれてしまうなど、否定的な面が現れやすいなどという指摘もされています。臨床の論文というのは、時には引用文献なしでもこれだけのものを書ける。もちろん、そうするとただ安易に、引用文献無しでも書けるんだという風になっては困るわけですけど。それなりの理由があり、コメンテーターを納得させるだけの

力のある論文だった場合、今のようなコメントが成り立つだろうと言います。これは大きなテーマに感じました。心理臨床という場合は、科学的論文とは違ったニュアンスを含んでいるのだな、そしてまた、ファンタジーのような感じや物語的な論文など、特殊な内容の論文作成について、興味深く考えさせられました。

そんなことで、物語、宗教、哲学などにも、うんと親しんでもらっていいと思います。そんなに難しく考える必要はありません。でも、哲学者や文学者、物語作家などの書いたり話したりするものの中に、時々きらっと自分に役に立つと思われる言葉を発見します。例えば、先ほどの竹田先生のコメントなども、そんなに深く受け取ったわけじゃなくて、何気ないコメントの中で、あーそうかもという風に気がつくわけですね、そういうルールとか構えていると、気付きやすいです。とにかくいっぱい読むことです。この1冊だけというのではなく、どんな本でもめくってみる。

また絵本は言葉も短く、情報は一見多くありませんが、考えて、推理し、連想や想像することで、いろんなもの、隠れている意味などを発見していく面白さがあります。だからこそ、大学院の臨床心理のエキスパートの先生たちが、絵本を皆で読み合う会を作り、もう何年もずっと続いています。面白くて、みんなでゲラゲラ笑うこともいくらでもあります。絵本は楽しくて奥が深いと感じますから、授業で使い学生にもディスカッションさせますが、たった1冊の、読めば実に簡単な本が、1時間半の授業では料理しきれないものもあることに気がついていてる学生もいるんじゃないかと思いますが……。

まあ、私の後に控えている人たちはそれぞれ本当に心理臨床一筋に生きてこられた先生たちですから、最初の僕の出壘をフォローしていただけるということで、取りあえず、セーフティバント成功したかどうか分かりませんが、1塁に駆け込んで行きます。あとは、2番、3番の方に長打をお願いしたいと思います。これで終わります。有難うございました。